

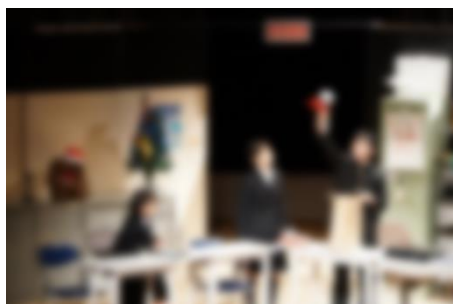
第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号16番 北海道帯広三条高等学校（十勝支部）

「お昼の放送」 作：井出英次

この芝居は放送局員の三人の絆が次第に深まっていく、愛に満ちた物語である。

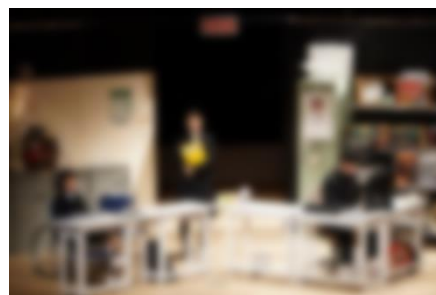
緞帳が上がると、そこには小道具類により埋め尽くされた棚と、狭い印象を与える放送室内のセットがあり、雰囲気がよく伝わってきた。演出では、場面の合間に流れる音楽やブルー暗転は三人が過ごしてきた時間の経過や季節が変化を表し、衣装のちょっとした変化といった細かい部分などにも丁寧な工夫が施されていた。



局長と朝倉は従姉妹の関係にあり、朝倉が病気で衰えていることを分かっていた。朝倉の将来はアナウンサーになりたい夢を叶えさせたいという局長の思いやりが、こだわりの昼の放送を再開させる。二人はあくまでも従姉妹ではなく先輩後輩の関係でありつつ、局長は特別な接し方はしない。この姿勢は、局長が朝倉を大切に思っていたからこそではないかと推察された。物語の進行につれ、朝倉の容体は悪化していつ

ていることが、杖や車椅子の種類、ゆっくりしゃべるようになること等の変化により確かに伝わってくる。しかし、けっして大げさに心配したりせず、いつも通りに接する局長と小竹の姿と、そのことに、逆に気遣うように「辞めたい」という朝倉の台詞が痛々しく心に響く。活舌のトレーニングに意味なんてないと言う朝倉に対し、朝倉のアナウンサーとしての足跡ともいえるリクエストノートを渡す局長に、朝倉の身を心から案じる優しさを垣間見ることができた。

局長にとって、小竹が持ってきたマイク君は朝倉のような存在であった。局長が卒業する3月1日、小竹は放送をジャックして、人工的に合成した朝倉の音声を用いて、「お昼の放送」を決行する。いつしか、局長の思いは小竹に受け継がれており、そこにも3人の絆が深まっていることを感じさせた。物語の終盤、局長はマイク君に話しかける。それは、あたかも放送を終えた朝倉がいつものようにそこに存在しているかのような状況であったものの、マイク君からは反応が返ってくることはなかった。このことについては、これは朝倉がもう戻ってこないこと、声が出なくなってしまったことを示しているのではないかという意見が出



た。作中の歌の構成が「さよなら」「ありがとう」「言葉にできない」と朝倉の心の声を代弁していると感じ、心打たれたという意見もあった。局長という存在は人をつなげる役割を持っており、それは新局長になった小竹にも受け継がれたのではないかと感じた。アナウンスマイクの前に椅子が無いのは、車椅子のスペースを確保しているからであり、進路に言語聴覚士を志しているなど、局長はどこまでも朝倉のことを気にかけているという優しさが伝わってきて、その切なさに胸が苦しくなった。人に対する深い愛情と慈愛の心に満ちた、心あたたま作品であった。